

エミシ、アイヌ民族はスキタイ、バルカリアンの末裔か

ーアイヌの墓標から見た北方騎馬民族の刀剣と日本の上古刀との関連性の研究ー

東京都町田市 菅原鉄孝

はじめに (縄文土器とアイヌの神々)

イタリヤ人のフォスコマライニ氏が『アイヌのイクパスイ』と言う書を一九七〇年に書いている。この書にはアイヌ民族(以下、アイヌ)の十三神など多数のイラストが掲載され、意味不明の印も非常に多い。多く見られるのは沖の神・鯨(シャチ)「△」、陸の神・熊「X」、空の神・鶴「くくく」、山の神(図4)などだ。

筆者の住む町田市の隣りの相模原市立博物館で縄文

土器の展示が行われた時に相模原市当麻で出土した勝坂式土器が展示さ

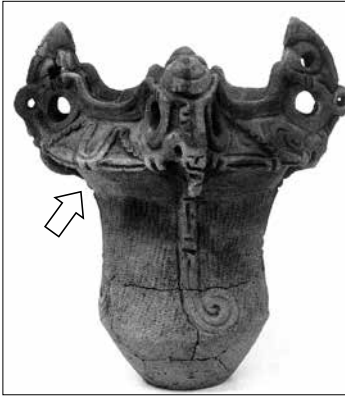


図1 海の神シャチ(鯨)の紋様
講談社『縄文土器大成』第2巻中期

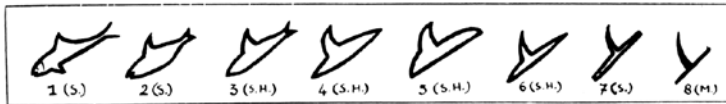


図2. シャチ rep-un-kamui の像 (『アイヌのイクパスイより抜粋])



図3. 空の神鶴(くくく)が中天に羽ばたく

れた。縄文中期の土器の中にアイヌの神々が多数描かれていることに驚かされた。この展示会で筆者は、アイヌは北海道だけに存在しているのではなく縄文時代から関東地方に生存していたのではないかと考える契機となった。

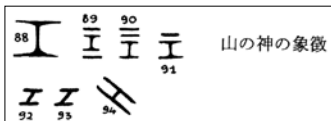


図4. 山の神

縄文土器の三叉紋(△)は沖の神ーシャチに類似(図2)。この他にも空の神が上縁に描かれ「くくく」のように描かれるもの(図3)、陸の神は「XXXX」のごとく描かれているものがあつた(図7)。しかし、アイヌの神々という説明を見ることはなかった。

縄文中期の勝坂式土器には人面土器と称するものがある

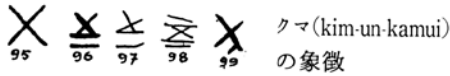


図7.クマの象徴 (『アイヌのイクバスイ』より抜粋)

れていると考える。図6は亀の上に立つ四頭の象、上天を蛇(星座)が巻き付いているインドの宇宙観(図6)に由来する。この図があれば地震や竜巻、星座の動きなどを一応説明する事ができる。四本の柱は東西南北に配置され、やがて人びとは東西南北へと旅をして人類大移動となる。

図1の勝坂式土器をシャマニズムの的に観察すると、中天に鶴が羽ばたき、大地に熊や、人間以上の力を持った動物の神威を描き、激しい火炎が土器全体を覆っている様に感じられる。



図6.古代インド人が考えた宇宙
小学館『宇宙』

土器には、①上天(高天、天国)、②中天(我々が眺める空)、③大地、④地中に立つ柱の4つの部分から構成されるものが有るらしいが、縄文土器にもシャマニズムの宇宙観(図5)が含ま

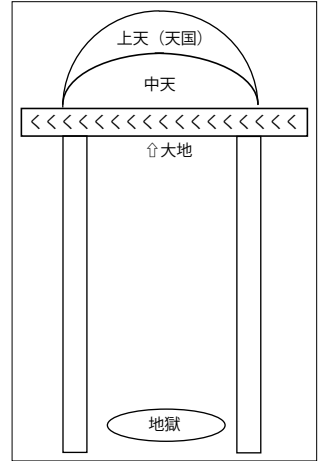


図5.ヨーロッパでみられる家の入り口や窓の形

が、これは太陽「●」を意味する事も考えられ、宇宙や自然の中の神秘性や美しさを表現していると感じさせる。ヨーロッパの

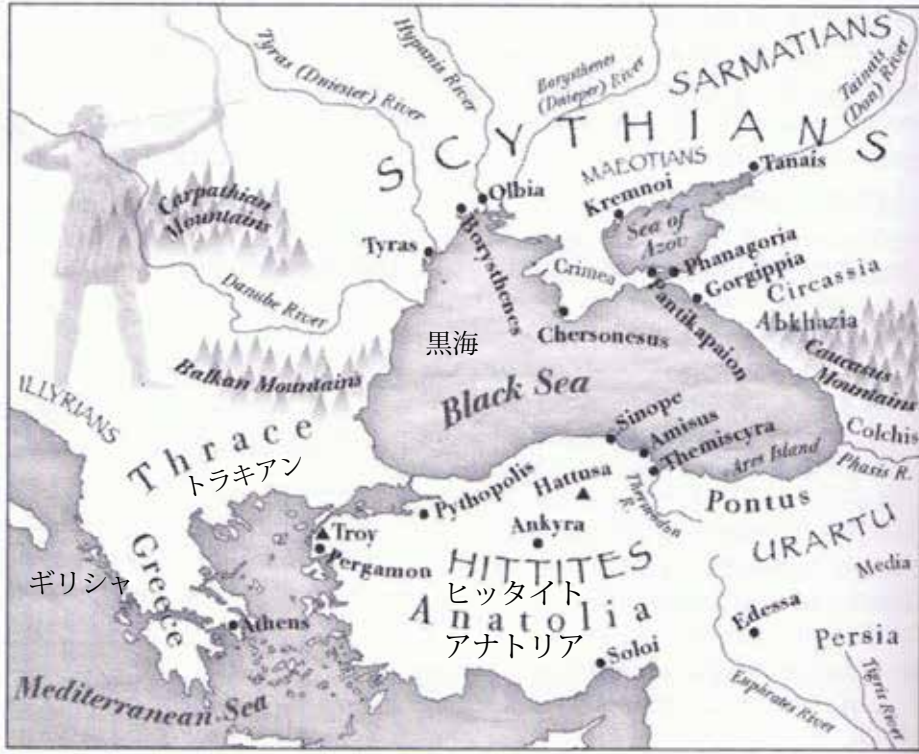
シャマニズムはシベリヤに発生した(注③)が、東西ヨーロッパやインドに伝播し、はつきりした宇宙観として描かれる様になったのである(図6)。太陽(●)、起伏のある大地(〰)、四方を意味する(十)、空をとぶ鳥(〽)、竜巻き(㊦)、山(△)、川(〰)などは幼少期に自然を観察した描写に似ている。しかし、それらのデザインは更に変容する。山の印は陸の神「熊」(X)に変容(図7)し、次第にアイヌ特有のシンボルとなっていくと推考される。

フォスコ氏のイラストを見た筆者は、アイヌの神々はアイヌ刀や更には日本刀にも影響を与えていると思われたので、筆者は一九九四年に『アイヌ刀と縄文土器』と言う論文を『舞草刀研究紀要』に纏めて発表した(第六号参照)。この論文の中で筆者は、北海道のアイヌの人達が自分たちのグループの特徴を墓標に入れ、墓標の特徴を製作した刀剣(塩竈神社収蔵)の茎に刻み込んでいることを述べたが、茎の形式は、後世の日本刀の流派へと継承されている事はほぼ間違いないと今でも考えている。

一九九四年から二七年を経て、アイヌの墓標が世界で最初に鉄剣をつくったスキタイ民族(以下、スキタイ)の刀剣に類似していることに気付いた。

そこで本稿では、その点を研究する第一歩として、

- (1) スキタイとアイヌのシャマニズムのシンボルの比較
 - (2) アキナケスの把頭、劍格(鏢)とアイヌの墓標との比較
 - (3) アキナケスの把頭、劍格と敵手刀などのタイプを比較
- 以上の三点により両者の関係を推定したい。いかなれば偶然の一致なのか、はたまた人類の移動によって起きた必



⇐サルマタイ

⇐スキタイ

図8. 黒海北部の古代ギリシャとタウリス (古代イラン北西部の都市) / スキタイ。スキタイ文化は一体化した (Emiene Sonnur Ozcan, "The Identity of Scythian and Turk" 2020. p.54)
Source: Michele Angel (drawing), Adrienne Mayor, "The Amazon, Princeton Univ. Press 2014. p.

ある(図8)。現在の研究ではイラン系(アーリヤン)と見られている。

骨刀()が造られたのは、スキタイ時代以前だが、骨刀から銅剣を造り始めたのはサルマト人でサルマタイ期という銅剣時代を築いている。次に銅剣を鉄剣に変えたのがスキタイであった。紀元前三世紀頃に世界で最初に鉄剣を作ったのはスキタイ民族で、今日では通説になっている。スキタイの刀剣の変容タイプは銅剣と鉄剣時代をとおして観察が必要である。

トルコの研究者エミネ・ソヌル・オスカンは、最近の著

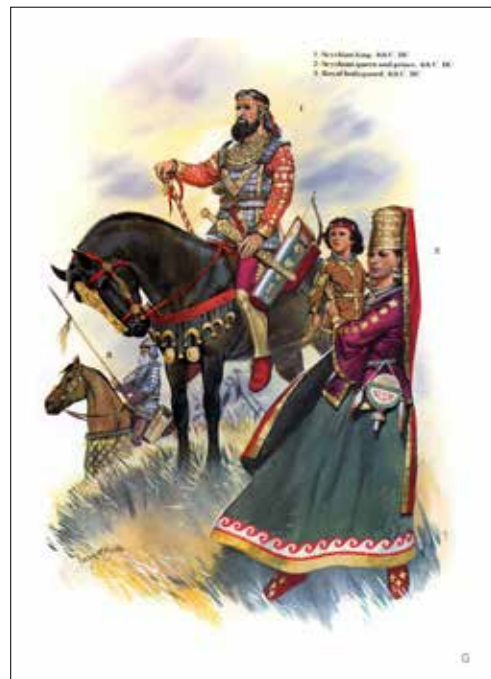


図9. 紀元前7-3世紀のスキタイ
Dr. E V CERNENKO ANGUS McBRIDE Dr. M GORELIK 『The Scythians 700-300BC』 P.28

然なのか、という単純な疑問からはじまっている。

一、スキタイの銅剣と鉄剣

スキタイの発祥地は黒海の北部(現在のウクライナ)で

書の序文で「スキタイとトルコの生活スタイルは非常によく似ている」と指摘し、更に「スキタイはタウリス（イランの首都 Tauriz）と共同体 (Unity) となり、タウリス／スキタイは、古代ギリシャと共同体 (Unity) であった」と述べている（注5）。スキタイ社会は青銅時代を築いたサラマチア



図 10. ギリシャの青銅剣（アテネ考古学博物館）

に近く、スキタイの青銅剣はギリシャに伝播（図10）した。それを示すようにギリシャの考古学博物館には多数のアキナケス形銅剣が展示されている。「アキナケス」という言葉は、ギリシャ語である。

彼らは、他の民族と同盟を結ぶ時には盃に相手の血を入れ、両手を絡めた腕で酌み交わすと言う性別さえも度外視した儀式が行なわれた（注6）。それは命をかけた約束であり、部族衝突を避ける一つの方法であった。



図 11. 杯を酌み交わすスキタイ『Thracian Warrior』

スキタイの勢力圏は、現在ではスキタイの生活様式の類似性から研究が進められている。その結果、各地にその形

跡が見いだされ報告されている。エミネ・ソナル・オスカンの前掲書によると、スキタイ／トルコの生活様式の類似性は7区域に及んでいる。（p.29 ただしその出処は Birni のノートにしたがっているようだ。図12）

七つの区域：
 I Hind インド（ヒカソ高原の北部地方）（Hind ヘルシャ名）
 II Lands: Garb, West (al-garb/al-Gharb) インド西部
 III Lands: Shan and Maghrib ダマスカス、アフリカ北部
 IV Lands: Iranshehr イラン諸国
 V Lands: Rum (Roman Lands) and Saqalib ローマ諸国
 VI Lands: Hazar and Turk ハザール、トルコ
 VII Lands: China and Tibet 中国、チベット

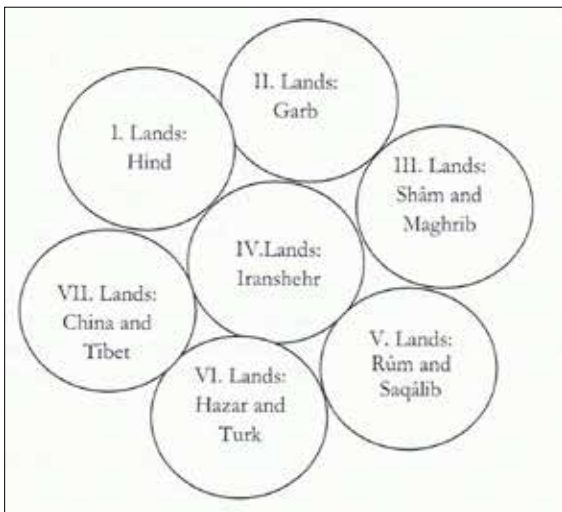


図 12. al-Birni's note: ペルシャ領ヘルメス

スキタイの生活様式の類似性はこの様に各地にみられるが、それはスキタイの銅剣時代に始まっている。例えば中国への影響を考察すると、周代銅剣に既にアキナケス銅剣の影響がみられる。し



図 13. Geographic division of ancient world according to the Greeks (approximately)
 Template-map: ミシガン大学・トルコ語訳 E.S.Ozcan

の大きな手掛かりになるだろう。(ただし、Wikipediaによると「アキナケスは平安時代の日本にも伝わっていることが文献に見える」(「アキナケス」で検索、参照)と紹介しているが、この場合は中国から持ち帰った銅剣なので論外とする。)

もう一点の興味深い点は、スキタイは単なる騎馬民族ではなかったことだ、彼等は大きな船(NYMPHEA)(図14)をつくり黒海周辺諸国と貿易をおこなう優秀な航海士集団でもあった。

黒海の船の権益をめぐり古代エジプトのファラオと戦つ

かし、日本への影響は銅剣から開始されているのではない、鉄剣から開始されているの興味深い相違点は時代を考えるうえで一つ

たことは有名である。そのファラオについては、「コーカサスのカバルディニアンが四百年かけてエジプトに移動しファラオになった」という伝承がカバルディーン・バルカル共和国に残されているので、移動中の400年間に黒海の貿易権を取得していたことになる。



図 15. エルミターージュ博物館収蔵スキタイの環頭大刀(鉄剣)。メリダ博物館で筆者撮影。

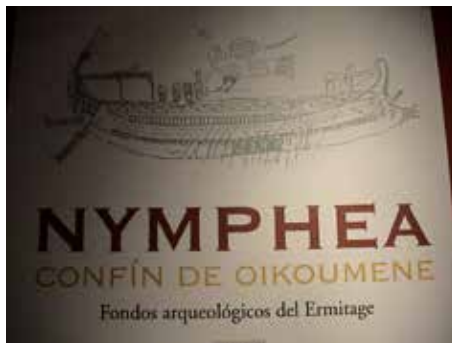


図 14. ニンフェア (Spain, Merida 博物館で筆者撮影)

スキタイとバルカリアン(カバルディニアン)は、カデシユの戦い(紀元前1286年頃にシリアのオロンテス川一帯で起きた、古代エジプトとヒッタイトの戦い)(Wikipedia)以前は仲が悪かった訳ではない。何故なら、コーカサスのカバルディーン・バルカル共和国には、スキタイとバルカリアン(天國)の形を地上に写し取り、墳墓(クルガン)を天國を地上に再現する位置に築いた。

置にあわせて作られていたので、両民族が共同で一つの星座を構成した可能性がある。彼らはアーリヤンの後裔であった。

円墳は、星座(天國)の形を地上に写し取り、墳墓(クルガン)を天國を地上に再現する位置に築いた。

第1表 アラジャ・ホユック発掘鉄製品の成分
(HAMIT ZÜBEYR KOŞAY, ALACA
HÖYÜK HAFRİYATI 1938 による)

	Fe ₂ O ₃	NiO	CaO	Al ₂ O ₃	Total	Fe	Ni
ピ ン	72.20	3.44	4.69	—	80.33	94.92	5.08
飾 板	76.30	3.06	0.99	2.65	83.00	95.7	4.3

図 16. ニッケルを含んだ鉄製品の分析値

スキタイの戦車と一致するか定かではないが、トルコのアラジャ・ホユックの2点の鉄製品の分析値をみると、双方にニッケルが五〜四%含まれているので、最初は隕鉄を加熱して成形した事が判明している。つまり一酸化炭素を利用した鉄鉱石の一次製錬は行なわず、天から降ってきた隕鉄をそのまま用いたことになる。ニッケルを含むと鉄は合金で堅くなり、鑄鉄よりも脆弱性は低くなる。隕鉄で簡単な車軸なら作れたはずだ。しかし、隕鉄の数量には限りがあるので、隕鉄に頼らずに彼らの銅剣鑄造技術によって、鉄

筆者はロシアのロストフドン市の考古学者に星座の位置を尋ねたところ、少しズレていると言う答えが帰って来た。地球の歳差運動(一万二千年周期で地軸が振れる動き)(注1)によって生じたズレと筆者は納得出来た。

カデシユの戦いで使われたスキタイの戦車の車軸は鉄製だったので戦いは有利だったが、鋼鉄製か鑄鉄製かを考えると、鑄鉄製の可能性がたかい。鋼鉄製はハンマリングできるが、鑄鉄は超高炭素鋼なので型に入れて成形する。もう一つは自然の隕鉄を使用した可能性も考えられる。

鉱石から鉄製品の生産する必要性が生じた。その為に最初に考え付いたのは、銅を溶かす土器を使って鉄鉱石をとく製鉄方法である。それが筆者の考える鑄造である。

製鉄に土器を用いる事例は、ユーリー・ピーツのエストニアの鉄関連遺跡の研究で明らかにされている(注2)。

スキタイの名声は、ヨーロッパでは紀元九世紀頃に失われてしまう。中央アジアではスキタイ/チュルキー(Turk)昔のオスマン帝国のトルコ人の勢力は十世紀頃まで続いた。考えられる名声消滅の大きな理由は、タタールとの闘いである。タタールはチュルキーの秀れた武器を自分達の為に作らせ、更には強引に結婚したので、次第に民族的混血が進み糾合化されてしまう。これがスキタイが名声を失なった実態である。「タタールの皆殺し」は有名で、世界中の多民族から畏れられた。



図 17. スキタイの金製品 (Spain, Merida 博物館で筆者撮影)

闘いを回避した多くのチュルキーは、現在はロシアの北西部ヤクーツに生存している。この状況から、スキタイ/チュルキーの一部が日本列島に船で逃避した可能性は当然出て来る。スキタイのシンボルには、日本にみられる菊の紋をあしらった金製品(図18)、神話を想起する八岐大蛇を描いた陶器などがある。彼等はジブシーの様に見える期間ごとに移動したか或いは日本の本州に上陸し、北上した民族ではないかと考える。日本列島は縄文時代中期頃から自由に移動出来る安全な島であった。

移動民族について若干補足するが、「ジプシー」はエジプトを回遊する人達で、「ロマーノ」はルーマニアを通過する人たち、「エムシ」(Amish) はカナダやアメリカに移動し定住しているが、日本のエムシも同様と考える。

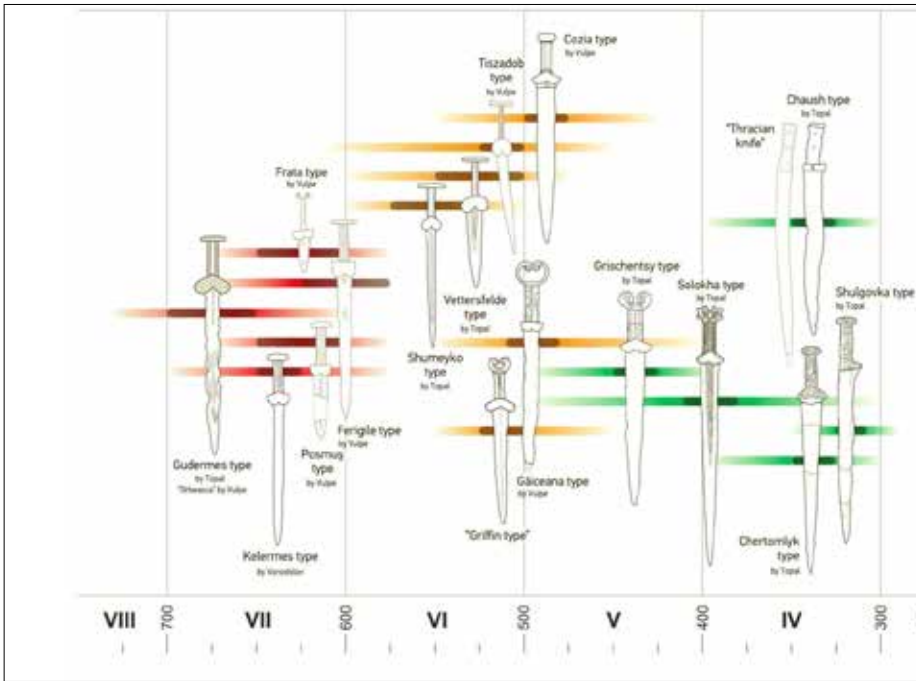


図 18. 刀剣様式 (Type) の年代編成: From "Akinakai: Scythian swords and daggers" (Communication for Eurasian Department of German Archaeological Institute, May 25, 2016)

一、アキナケスの時代別::様式別::分類
 ドイツ考古学研究所のウェブサイトがアキナケスの時代区分、様式による分類を行なっているので、日本と比較する上で非常に良い参考になる。

アキナケスの時代分類 (図 18 から抜粋)。
 前 7 世紀::ケレルメス (Kelermes) タイプ (675-600 BC)

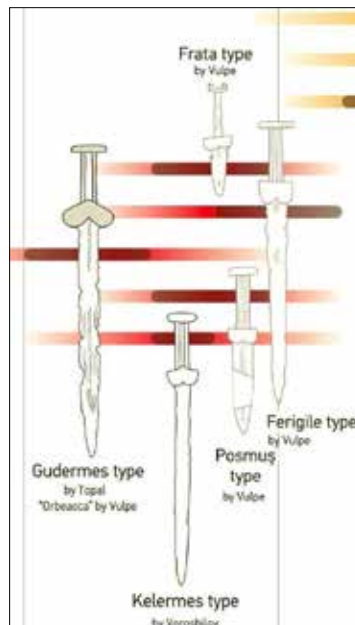


図 19. ドイツ考古学研究所ホームページから抜粋

①骨型グループ

前 6 ~ 5 世紀::ヴェツテルフェルド (Vetersfelde) タイプ (550-475 BC)

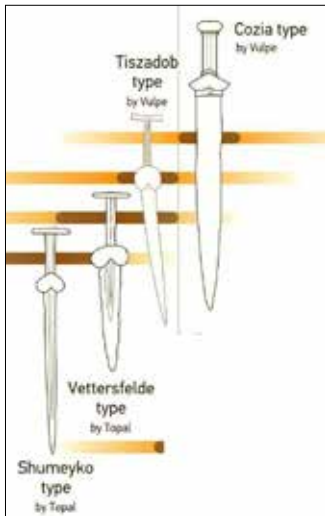


図 20. ドイツ考古学研究所ホームページから抜粋

②楕円形、T 形グループ

前5～4世紀：ソロカ (Solokha) タイプ (425-350 BC)

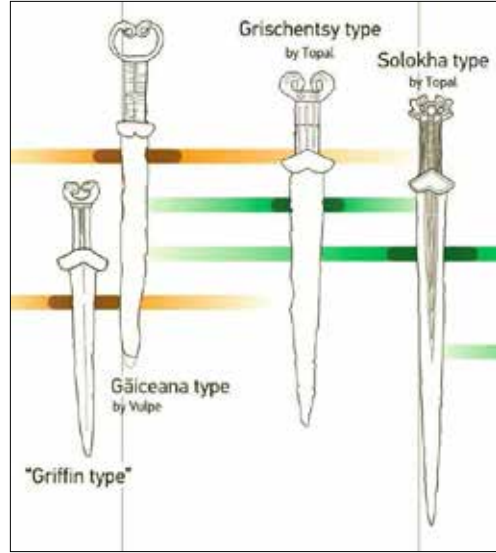


図 21. ドイツ考古学研究所ホームページから抜粋

③環頭形、羊角環頭形グループ

④羊角形グループ

前4世紀：チェルトムリク (Chertomlyk) タイプ (375-325 BC)

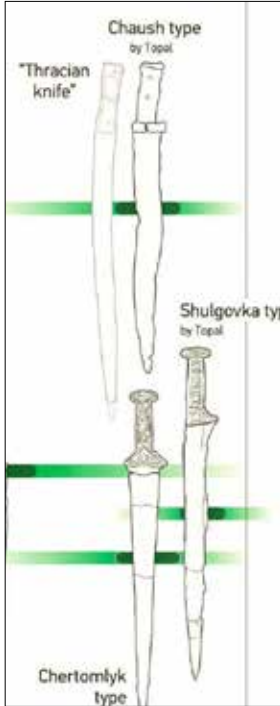


図 22. ドイツ考古学研究所ホームページから抜粋

⑤茎形グループ

⑥卵形グループ

アキナケスの様式別区分

【筆者が考察した特徴と名称】 (詳細は後述)

把頭名：

- ①骨形 (T形の原形)
- ②環頭形または羊角環頭形 (丸形)
- ③羊角形 (両方に渦を巻く)
- ④楕円形 (Tの角に丸味がある、T形の一つ)
- ⑤T形 (左右に伸びたTの角が鋭角)
- ⑥卵形 (楕円形より中に厚みがあり、卵状に見えるもの)



図 23. 骨形



図 24. 把頭による区分
左から 1. 2. 3. 4. 5. 6.
(scythian_akinakes_1_small.jpg)

柄部名称：

- ①毛抜形 (柄が透かしになっている)
- ②毛抜状 (透かしではないが柄に樋が入っている)
- ③毛抜状ヤスリ目 (樋の両側に横線が見える)
- ④剣格 (鏢) 名称：
- ①剣形 (上端が尖っているもの)
- ②ハート剣形 (剣形の一つ、全体がハート型)



図 25. 透かし柄のX-ray写真

- ③ 丸剣形（剣形の一種、剣形が下部についている）
- ④ W形（剣形の一種、上端が平のもの）

(1)ケレルメス (Keremes) タイプグループ

- ① "Gudermes" type by Topal, Orbeasca by Vulpe.
T形把頭：毛抜形柄、剣形鏢、長剣（樋かき通し）。



図 26.

- ② "Keremes" type by Voroshilov
T形把頭：縦線形柄、剣形鏢格（鏢）、長剣（樋無し）。

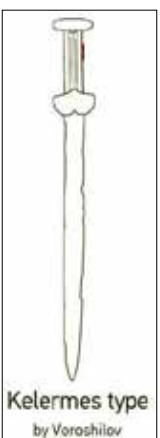


図 27

- ③ "Postmus" type by Vulpe
T形把頭：縦線形柄、W形鏢格（鏢）、短剣（樋かき通し）

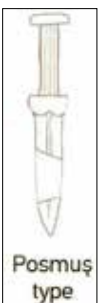


図 28.

- ④ "Ferigile" type by Vulpe.
T形把頭：縦線形柄、W形鏢、長剣（樋不明）

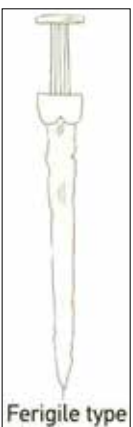


図 29

- ⑤ "Frata" type by Vulpe.
小羊角形把頭：細柄、W形鏢、短剣（樋不明）

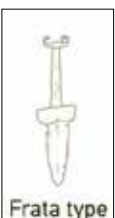


図 30

(2)ヴェッターフェルト (Vettersfelde) タイプグループ

- ① "Shumeyko" type by Topak.
T形把頭：太樋柄、ハート型剣形鏢、長剣（樋かき通し）



図 31

- ② "Vettersfelde" type by Topal.
T形把頭：剣形鏢、短剣（樋中ほどまで）

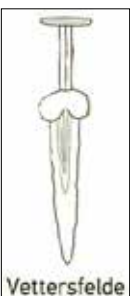


図 32

③ "Tiszadob type by Vulpe.
骨形把頭：細形（鑪目）柄、丸劍形鑢、弯劍



図 33

④ "Cozia" type by Vulpe.
楕円形把頭：槌入柄、劍形鑢、幅広長劍（槌無し）

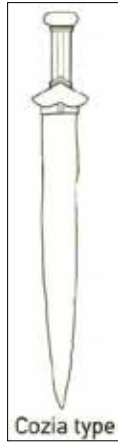


図 34

(3) ソロカ (Solokha) タイプ(1) 羊角グループ

① "Griffin type"

羊角環頭形把頭：槌入柄、Y形又は劍形鑢、長劍（槌無し）

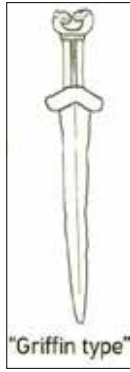


図 35

(3) ソロカ (Solokha) タイプ(2) 羊角環頭グループ

② "Gaiceana" type by Vulpe.

羊角環頭形把頭：横線（ヤスリ目）状柄、W形鑢、長劍

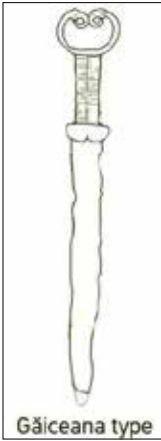


図 36

③ "Grischtsy type.
羊角形把頭：太槌形柄、劍形鑢、長劍（槌無し）

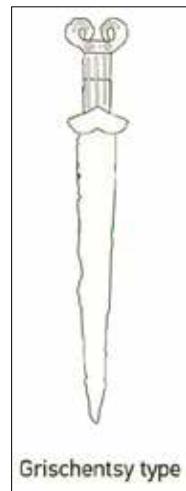


図 37

④ Solokha type by Topal.

羊角形葉飾把頭：太槌入柄、劍形鑢、長劍（太槌中程）



図 38

(4) チェルトムリク (Chertomyk) タイプグループ ①
Chertomyk type.

楕円形把頭：紋様入柄、紋様入劍形劍格、長劍（槌無し）

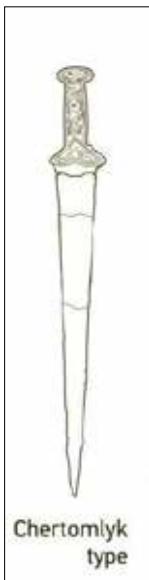


図 39

② "Shulgovka" type by Topal.
 楕円形把頭・文様入柄、入山形（片山形） 鍔、長劍

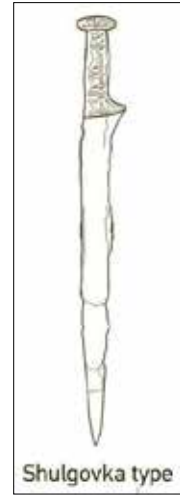


図 40

(5) 葦大刀様式グループ

⑤ Thracian knife. トラキアン ナイフ
 切り茎、目釘孔3、刃区なし、弯劍

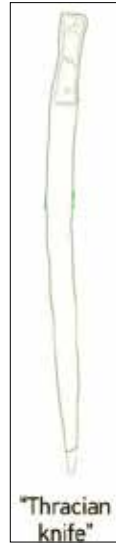


図 41

⑥ Chaush type by Topal.

切り茎、目釘孔2、刃区付、幅広長劍



図 42

三、アキナケスに見るシャマニズム

ジグザグ模様はスキタイのシンボルの一つらしいが、△や大きなXも腹部にみられる(図43)。
 アキネケスの柄部を拡大してみると、大地を示すようなジグザグ紋様が見られ、この印はスキタイの墓と同じ場所に埋葬されるバルカリアンの石像にもみられる(図44)。

図47はカフカス考古学研究所で筆者が2005年に撮影したが、実はその正確な意味はよく分かっていない。このジグザグ紋様は柄部では重なりアイヌの陸の神・熊(×)に類似するものが見られ、×は柄部や鞆の中央部にも大



図 43. スキタイの鉢巻きにジグザグ紋、腹部にX紋、腕に三叉紋(△). The Scythians 700-300BC より抜粋)



図 44. 銅剣に見られるジグザグ紋



図 45. アキナケス鉄剣(羊角)



46. 青銅のアキナケス剣、柄部にジグザグ紋がみられる



図 47. 大地の神を意味する紋様?

大きく表示されるようになる。×は大地のジグザグ紋から変化したものかもしれない。つまり、大地のジグザグを重ねるとX状になる。だから大地と熊の紋様



図 50. 日本刀の X 柄巻



図 49. X には深い意味があると説明する Nakov Felix 氏、Nalchik National Mueum, Russia.

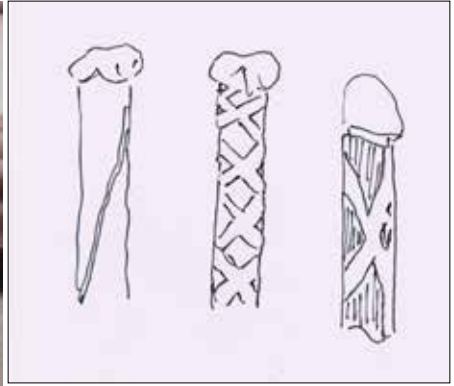
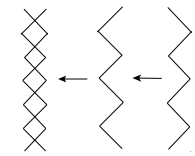


図 48. 骨刀の柄部に表れる X 印
(ナルチック国立博物館研究員 Nakov Felix 作画)
筆写がトレースしたもの

は強ち無縁とは思われない。陸の王者を刀剣に多数入れる事により、刀剣所持者が陸の王者を願望し、一方で大地の平穏なる事を願っている様にも見られる。

このジグザク紋様はスキタイからバルカリアンに伝搬し、更に日本刀の柄(図50)にも伝承されている事が分かる。アキナケス柄部には、他にもシャマニズムの模様を描かれているものがある。

結論的にいえば、スキタイのシンボルマークは、アイヌの神々と一致するものがあり、



縄文土器とも一致する可能性がよい。シンボルの意味も合致するかもしれぬ。更なる今後の比較研究が必要である。

四、アキナケスの様式変化(図 59)

アキネケスの変容は、大きくなってわけるとすれば次のようになるだろう。

- ① 骨刀に始まる T 形から銅剣の Y 形へ変様。
- ② 渦状になった羊角が両方に伸び環頭形に変容。
- ③ 羊角環頭から羊角に変様。(逆はない)。

骨刀は T 形や楕円形、卵形に変様し、最後にトラキヤンの莖形に帰結する。武術の進化による機能性の発展である。アキナケスの変様は Oleksandr Shelekan (注 4) によってまとめられているので、次頁以降に掲載する。

スキタイ民族の生活圏と年代は、図 59 に掲載する。彼等は草原ルートを通り中央アジアへ進出して行くのである(図 63)。筆者が推定するルートは図 64 に掲載した。

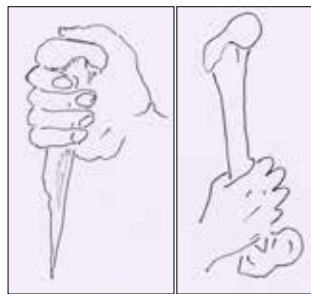


図 51. 骨刀の使い方一例



図 52. 骨刀と銅剣 (Nasledye, Russia)

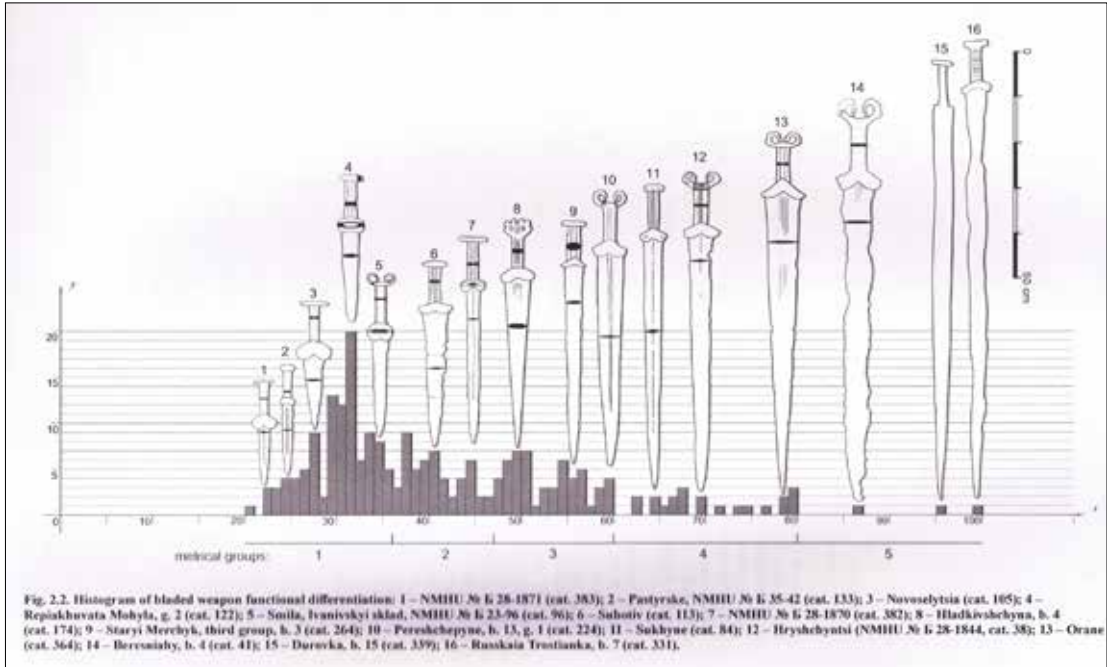


図 53. 刀剣の刃の機能性に基づいた分布図
(Swords and Daggers of the Scythian Forest-Steppe, 2020. p.33)

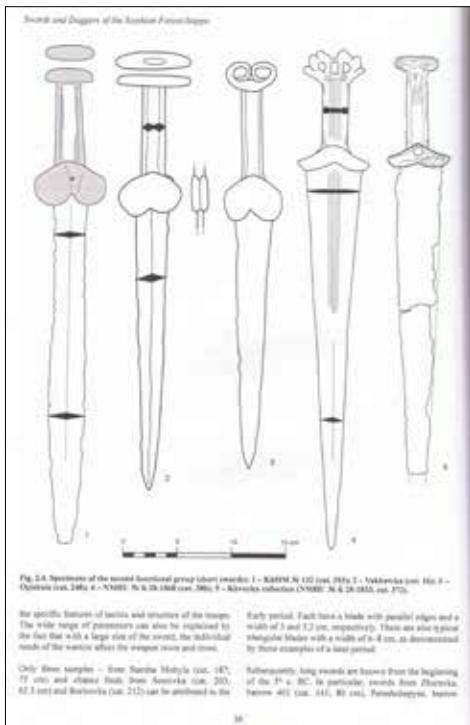


図 55. Daggers of the Scythian Forest-Steppe, 2020. p.36)

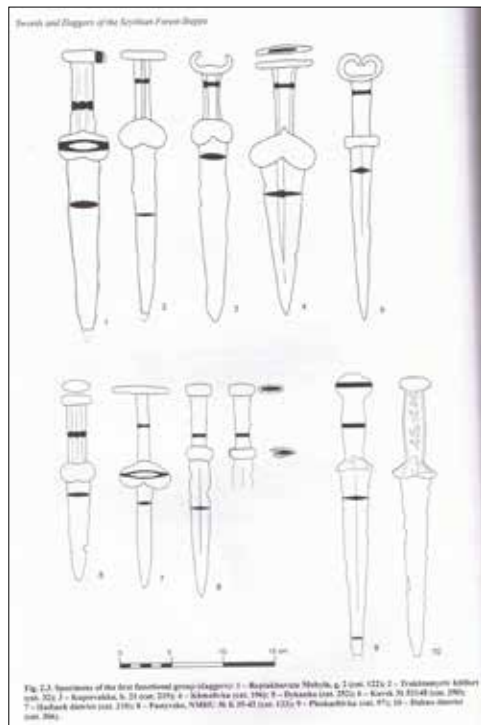


図 54. アキナケスのグループ別変様
(Swords and Daggers of the Scythian Forest-Steppe, 2020. p.34)

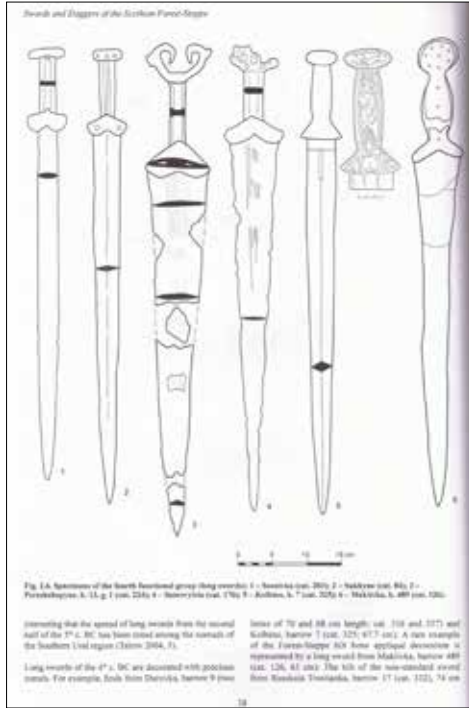


図 57. アキナケスのグループ別変様 4
(Swords and Daggers of the Scythian Forest-Steppe, 2020. p.38)

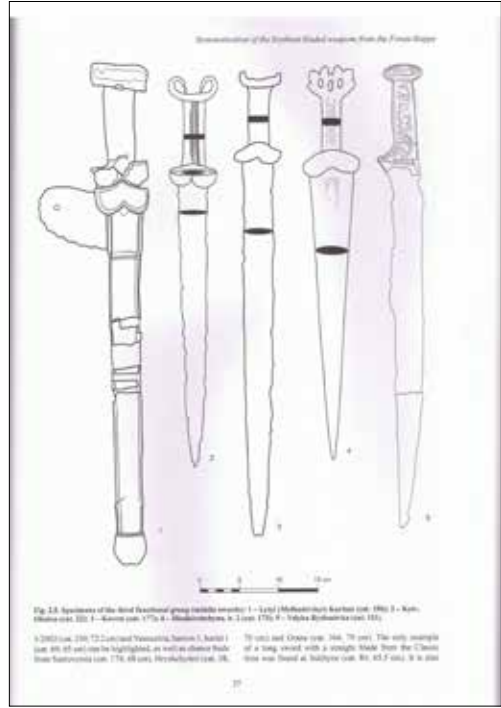


図 56. アキナケスのグループ別変様 3
(Swords and Daggers of the Scythian Forest-Steppe, 2020. p.37)

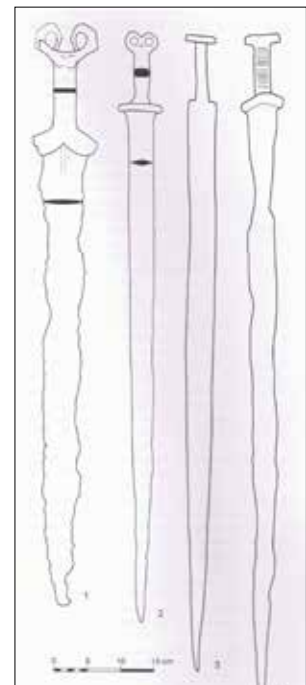


図 58. アキナケスのグループ別変様 5
(Swords and Daggers of the Scythian Forest-Steppe, 2020. p.38)

六、シベリヤでアキナケス環頭が蕨状に変様 製鉄遺跡と出土した鉄器

クラスノヤルスク大学にいた考古学院生グラジーンによつて製錬炉に土器が使われているという報告がある。しかし、「その土器は焼結粘土であつて土器ではない」ということで土器使用説は否定されている。しかし、注目されるのは、環頭ナイフから蕨手状のナイフに把頭の変容が紹介されていることである。製錬炉は高温で使用された様だ。

以下は筆者がグーグルを利用して翻訳した文章である。

シベリヤのノボシビルスク地域での考古学的調査ノボシビルスク・ナウカ、1985。

В.В. ГЛАДИЛИН (В. В. Gladilin) グラディーン著
МЕТАЛЛУРГИЯ СРЕДНЕАНГАРЬЯ

中部アンガラの金属

冶金生産は、中部アンガラの古代人口の主な活動の一つです（狩猟や釣りとともに）。ジーガン時代の文化層には、空気吹きパイプ、シュート、スラグが見られます。エドチャ

五、スキタイグループの生活圏と年代

(ドイツ考古学研究所による)

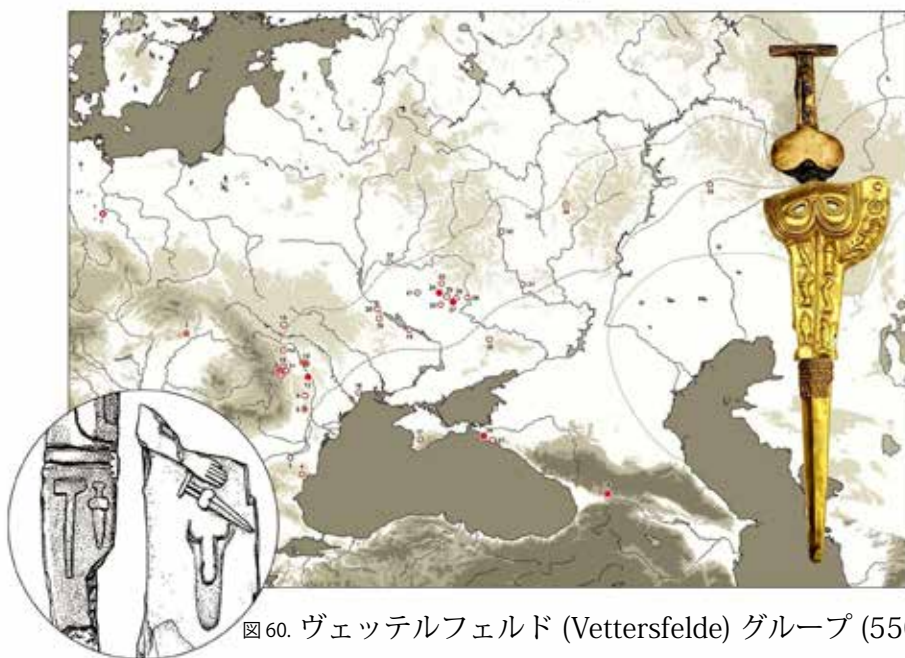
丁形、羊角形把頭、毛抜形柄、剣格・剣形主体、W形など変形)

ARCHAIC SCYTHIA: Kelermes type (675—600 BC)



図59. ケレルメス (Kelermes) グループ (675-600 BC)

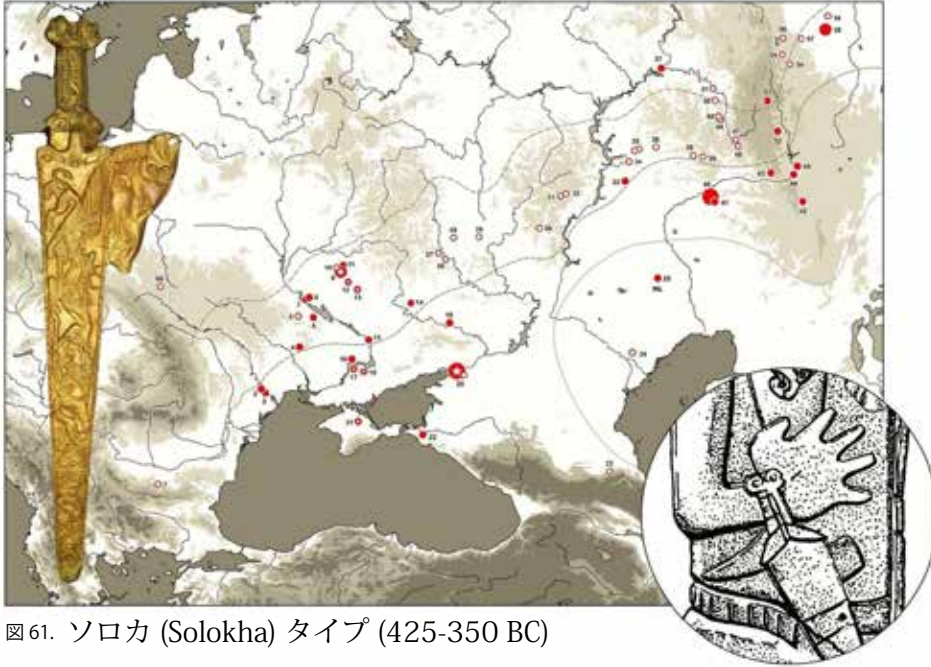
MIDDLE SCYTHIA: Vettersfelde type (550—475 BC)



丁形把頭、毛抜状柄、剣格、剣形主体ハート形

図60. ヴェッテルフェルド (Vettersfelde) グループ (550-475 BC)

CLASSICAL SCYTHIA: Solokha type (425—350 BC)



形 羊角形、羊角環頭形把頭、ヤスリ目入柄、劍格：劍

図 61. ソロカ (Solokha) タイプ (425-350 BC)

CLASSICAL SCYTHIA: Chertomlyk type (375—325 BC)



楕円形把頭・紋様入柄、劍格：紋様入劍形

図 62. チェルトムリク (Chertomlyk) タイプ (375-325 BC)

ORIGIN: Three main hypotheses



図 63. ダガーによる3地域の関係図 (Kabardino-Pyatigorsk dagger, Persian-Median dagger, Karasku-Tagal dagger. From "Akinakai: Scythian swords and daggers" (Communication for Eurasian Department of German Archaeological Institute, May 25, 2016)

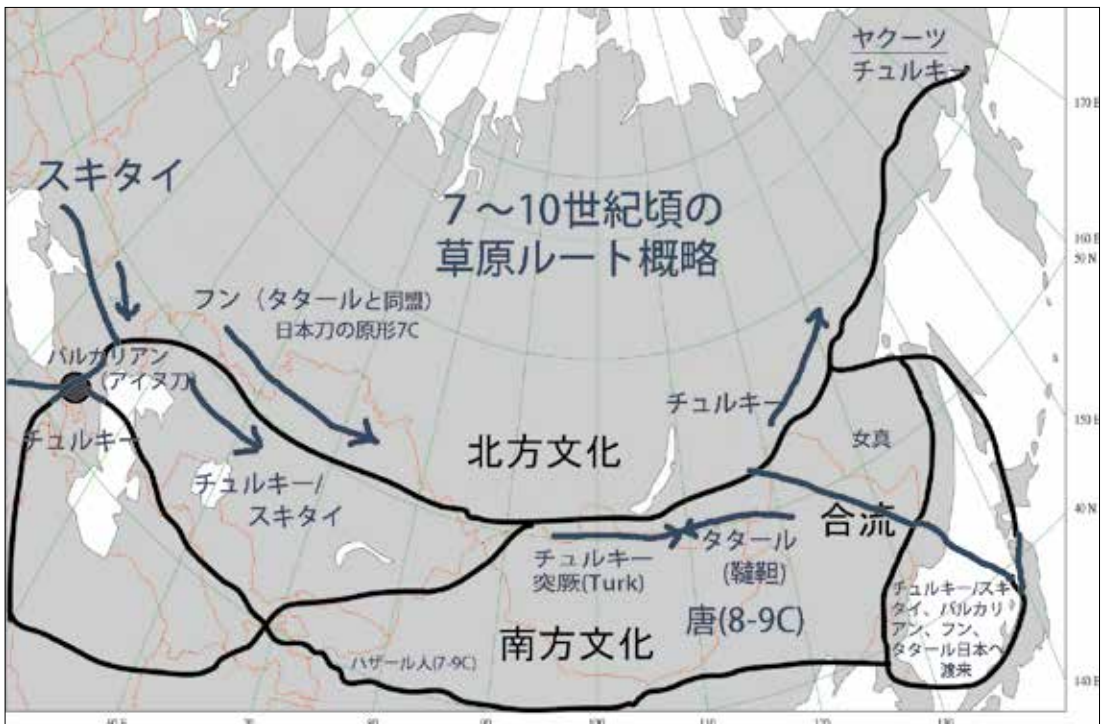


図 64. 7 ~ 10 世紀頃のスキタイ文化の移動ルート (筆者作成)

ンカの集落で、数十キロのスラグとクリットを集めました。

鉄製錬の生産材料と鉱石のデータ。これは、スレドネンガルスクの地質探査グループによって実行された考古学資料とスペクトル分析のデータによって確認されています。製錬用の鉱石はまだ未知の小さな鉱床から採掘されました。衛星の要素、つまり鉱石スラグの衛星と、近くにある既知の鉱石の発生源の完全なセットはありません。おそらく、水酸化鉄に代表される風化地殻からの鉱石が使用された。鉱石スラグは、Tagar 産地および異常10の針鉄鉱・ハイドロゲータイト鉱石に最も類似しています。そのようなウイズの鉱石の堆積物は、ボロビエボ、ズドウチャンカ、イリム口、ウストコバ、パシーノにあります。チャドベツトは非常に強力な鉄鉱石を産出し、古代の冶金学の高度な発展に十分です。

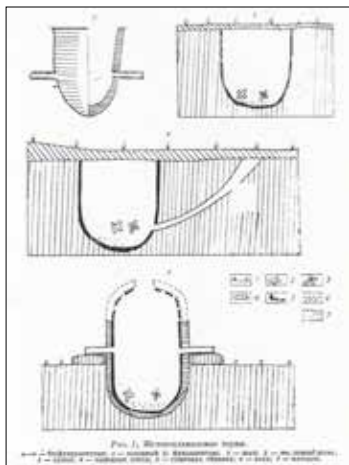


図 65. 発掘した製錬炉

アンガラ中部の発掘中に、2種類の溶解炉が見つかりました。基礎のない溶解炉（図一、a,c）と、地上、つまり地面にある溶解炉（図一、c）です。次に、最初のタイプは一つのタイプに分けられます。一つ目は鉱石と石炭が注がれる、より容器のような炉に属しています。ノズルから空気を供給した（図一、b）。そのような炉の破片は、上記のすべての集落で見つかりました。1967年に、

Chadobets スタンドで2つの標本が見つかりました。炭素C14の日付は 2230 ± 100 (KRII-251)、つまり紀元前IV-III世紀です。ZBZペトリは、**坩堝の容器**で溶けるプロセスを次のように説明しています。ホーンは、底が楕円形の大きな厚壁の鍋のように見えました。2つのノズルを収容するために、ポットに2つの穴が開けられました。ウツエルガ溪谷のキャンプで、先史時代の鉱山を発見しました。鉱山は、現在は完全に放棄され、土で覆われています。教授によると、遺跡から鍛冶場を再建した Grum-Grushmallo は、高さが約3/4のアルシンと幅が1/2のアルシンであるとされています。それに鉱石と木炭が重なった。混合物に点火し、その後、鞴を使用してノズルに吹き込んだ。

石炭と鉱石が上に追加されました。溶けた鉄は鍛冶場を壊すことによって取り除かれました。そのため、キャンプにはスラグが付着した非常に多くの壊れた鍛冶場があります。上記のプリミティブ処理を施した鉄は、優れた品質を持っています。これはいわゆる「チーズ吹き鉄」であり、多くの点で、私たちの現代的な方法で生産された鉄のグレードよりも劣っていません。驚くほど純粋で、99.43%含まれています。それは優れた品質の素材と見なされるべきです。

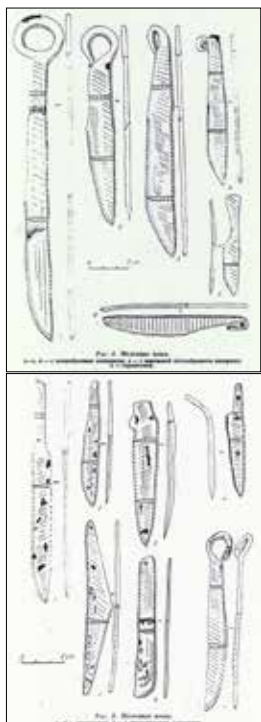


図 66. 環頭から羊角刀へ変様

以上がグラジリン報告の概要である。



図 67. アルタイ東部ハカシア共和国のクルガン（円墳）出土品（ハカシア共和国国立博物館で筆者撮影）

この報告で重要な点は、一つは坩堝製鉄法（ウーツ）ではないか、と言う点。彼は、「坩堝の容器で溶けるプロセス」について述べているからである。

性が生ずる。

図 67 は筆者がロシアのハカシア共和国で撮影したスキタイのクルガン出土品である。ここにも環頭形（中央右）、卵形（左）、立鼓形（中）アキナケスがみられる。右側土器はオホーツク式土器に似ている。

七、坩堝製錬について

筆者はこの製錬遺跡の論文を翻訳しながら古代トルコの製錬方法を思い出した。ノボシビルスクの焼結粘土の様な穴窯をつくり、そこに沢山の坩堝を装填して加熱する方法である。坩堝のなかに鉄鉱石を入れて密閉する。このとき鋼

もう一点は生産された鉄器に見られる把頭の変様である（図 68）。環頭から蕨手状に変化している点が筆者には重要に思われる。つまり、アキナケス環頭形から変様して蕨状に渦を巻くので、日本の蕨手刀のルーツの可能性が



図 68 インドで発掘された坩堝（ウイスコンシン大学マークケノイヤー博士製作提供）。

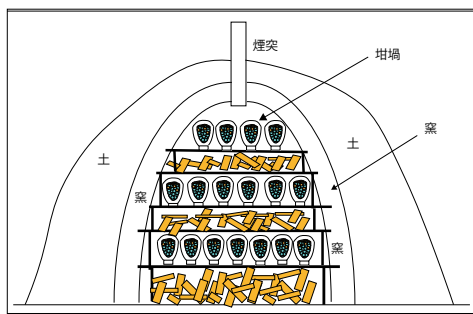


図 69. 穴窯による製鉄（Kayahan HOROZ）筆者作画

の製法から発展した製錬方法で、紀元前から行われていた方法と考えられる。しかし、考古学者 Anna Feuerbach の研究によって、トルコで 5 世紀頃に行なわれていた事が確認されている。（注 5）。

筆者は Anna Feuerbach で検索し、https://www.youtube.com/watch?v=GBSh_FFXpGA で彼女の説明を聞きましたが、「坩堝法で得た鉄で製作したヤタガン（刀剣）は 90 度に曲げ

を生成する炭素として坩堝の中に木の葉を一緒に入れる。

鉄鉱石と炭は分離されるので加熱方法は木炭でもコークスでも何でもかまわない。ただ高温になればよいだけ

だ。トルコの研究者カヤハン・ホロズ氏は一六〇〇度で加熱すると筆者に言った。製錬したあと穴窯から坩堝を取りだして壊し、中から鉄を取り出す。

インドで発掘に携わったウイスコンシン大学のマーク・ケノイヤー博士は発掘した物と同じ物をつくり、筆者に提供してくれた（図 68）。

この方法は土器を用いる青銅

ても折れず、「元に戻る」と述べ、この技術が「インドや中国などにも伝わった」と英語で説明している。

「メルブは紀元前6世紀からアケメネス朝ペルシャのシルクロードのオアシス都市として繁栄し始めたので、シルクロードを経て中国へも伝わった」と述べていました。アフリヤン、スキタイ、バルカリアン、がシルクロードを経て中国から朝鮮半島、そして日本に伝わり、その技術によって日本刀が形成された可能性がでてきた。」(注10)

八、北海道での製鉄状況

近年、北海道北部の礼文島元地遺跡



図70. 左に伸びた鉾滓は鉄分を殆ど含有せずに剥離していた。土器を横にかたむけてノロを流し出したらしい。一次製錬は否定されている。(写真提供：北海道大学)



から、鍛冶に使われたオホーツク式土器が出土し、これにより十世紀頃に北海道で土器を使った鍛冶が行われていた事が確認された。しかし学説上、製鉄の可能性は否定されている。それは一

次製錬、二次精練という区的認識方法に問題があるから

かも知れない。本州で行なわれていた「タタラ製鉄」という観点から土器を考察すると、どうしても一次製錬、二次精練を持ち出して議論がはじまる。

筆者も北大で見学させて頂いた時、土器に付着するように流出していた鉾滓をみて一次製錬のノロと推定したが、刀鍛冶の法華三郎氏に写真を見ていただいたところ、①土器を地面に立てて設置したこと、②土器の内部が泡立つ程に溶融しているので内部温度が一二〇〇度に達していた可能性がある、という感想を頂いた。更に③もし鉄加工の為の鍛冶滓(金肌など)なら、ノロは土器から剥がれ落ちない程に膠着する、ということだった。

加工するために一二〇〇度は必要だろうか。鉄を赤めて加工するだけなら、一〇〇〇度以下で充分ではないのか。一二〇〇度では土器の内張粘土が溶融してしまう。そこまで上げたのは、土器が溶融しても構わずに原料鉾石を単に溶かすのが目的だったのではないかと考えるに至った。結局、

ノボシビルスの製鉄炉のような土器を用いた坩堝製鉄法(ウーツ)を想起するに至った。石炭で高温加熱して製錬できる方法だ。



図71. 韓国で考えられている坩堝法か？この図は使い方が間違えている。中に装填されている坩堝が密閉されていない。

北大から送られてきた資料を再点検したところ、韓国語で描かれた図がみつかった。それは坩堝製鉄法（ウーツ）に類似しているが、坩堝は密閉されておらず、白い煙りを出していた（図72）。この図は坩堝法を描こうとしている様に見えるが、間違っている可能性が大きい。

北海道では、東北でタタラ製鉄が確認されている九世紀から計算すると一〇〇〇年後の十世紀に始まった事になり、しかも、それはオホーツク人が大陸から持ちこんだ鉄を加工していたということになっている。しかし、「この坩堝法は、東北でも9世紀以前に行われていた方法で、タタラ法が北上して淘汰されたのではないか」と筆者は推定する。

東北で一〇〇〇年前に製錬していた情報が北海道にもたらされないわけは無い。7世紀頃、北海道の周辺海域は海流を利用して交通が非常に発達していた。白村江の闘いに東北



図 72. 北海道余市のフゴッペ洞窟出土動刀

からも出兵し、8世紀頃に終結している。余市のフゴッペ洞窟から見つかった円頭（方



図 73. 韓国の円頭大刀

頭) 大刀は朝鮮半島から持ちこまれたものと考えられている(図73)。図73は朝鮮半島の円頭大刀。

九、本州での製鉄と作刀



図 74. 秋田県壺ヶ沢遺跡出土

因みに本州北部の秋田県で、九世紀頃に豎形炉を使ったタタラ製鉄が行なわれていた(壺ヶ沢遺跡図74)。見学した筆者は浜砂鉄を木炭で製錬して鉄を生産していたことを確認した。この技術は南から北上したタタラ製鉄と見られるが、鉄鉱石を高温(推定二五〇〇度以上)でとくす鑄鉄法(鉄押し)も行われていた(軽米遺跡)。しかし、このタタラ法が北上する以前の製鉄方法はどのように考えたらいだろうか。

六世紀後半に作られた群馬県二子山古墳刀の地鉄を考察して見よう(図75)。

鑄造りの刀身の地は板目肌立ち、大小の沸がよく働き、綾杉状の渦巻き肌が見られる。この地鉄はタタラ製錬炉によってもたらされた鉄ではないといえる。渦巻きは人工的に造られた模様

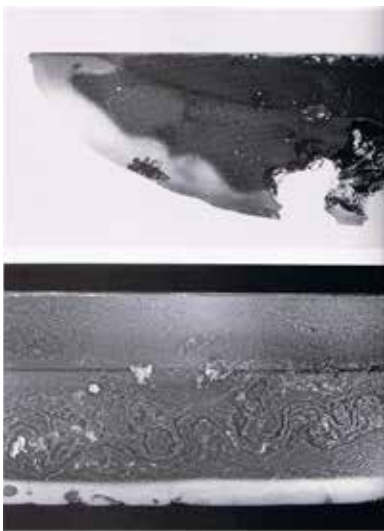


図 75. 群馬県二子山古墳の大刀 (6世紀後半)

ではなく、小粒にまとめられた鉄塊を一旦まとめて作刀したと思われる。つまり小粒の鉄塊とは、坩堝法で作られた複

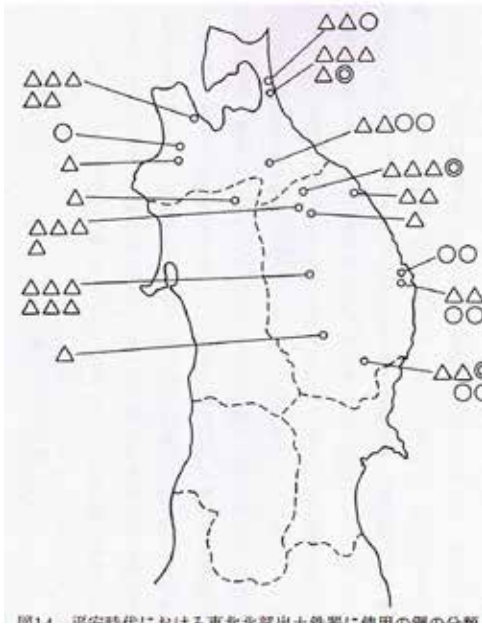


図76.「古代刀と鉄の科学」P.214より抜粋

注に よる、鉄が倒れると、岩鉞圧的多的製刀に都合は、



図76. 宝珠の地鉄

数の鉄塊のことである。これが上古刀の地金であり、坩堝製鉄法が古墳時代の製鉄法であろう。現在の学説では、タラ法が朝鮮半島からもたらされた事になっているが、当初のタラ炉も非常に小さいので、(坩堝法同様に) 小粒の鉄塊を作ったはずだ。(この地金は宝珠にも見られる。)

島根県で行われている様な現代の箱形炉や、秋田県の9世紀の豎形炉は、かなり大型化したものだと思う。古墳時代には、坩堝法や小型の手吹きタラ炉で作った鉄が主流であったはずで、特に東北北部の作刀は、古墳時代を過ぎても小粒の鉄塊をつくって行われていたと見られる。

「平安時代に於ける東北北部出土鉄器の使用の鋼の分類」

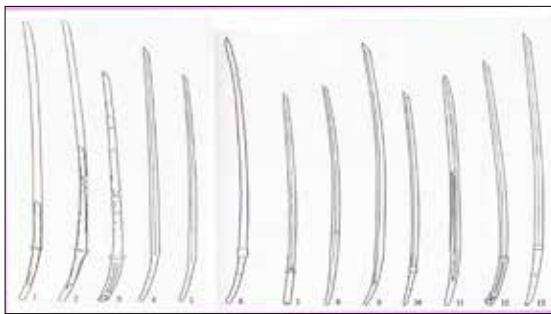


図80. 古大刀「古代刀と鉄の科学」より抜粋



図79. 毛抜形 蔵手刀

図78. 蔵手刀3形式 (石井昌国『蔵手刀』)

がよかつたのではないかと思われる。鉄分含有率の選択が容易であつた。

十、日本の刀剣様式

日本刀が完成したのは平安中期頃だと言われるが、その理由は、「古墳時代の蔵手刀(七世紀後半)から毛抜形刀(八世紀後期)、毛抜形太刀(十世紀初頭)、古大刀(十一世紀)への弯刀としての発展」と、「四世紀前半にはじまる直刀系の平造(四世紀)から鎚造(八世紀)への発展」、この両者の結合がみられる古大刀(十一世紀)の年代が平安中期頃(十、十一世紀)に重なっているからであろう(図80)。

もう一方で蔵手刀から立鼓柄刀(九世紀後半)、蝦夷刀(十一世紀)への変遷、別系統の平造刀(十一世紀中期)もあり、直刀と弯刀の影響は相互補完的に両系統に影響がみられる。

要約すると次のようになる。

- ①直刀系の年代..

いることによるが、これらの様式が全て日本国内で考案されて発展したと考えることはできない。その理由として蔵



図 82. 立鼓柄

③もう一方で蔵手刀か
ら立鼓柄刀（九世紀後半）、
蝦夷刀（十世紀後半）、平
造刀（十一世紀中期）の系
列も指摘されている。
このような系統の区分
は、弯刀の様式、柄の様式、
造りの様式などが異なって

平造直刀（四世紀前半）、広幅平造直刀（七世紀）、切羽
造直刀（八世紀）、鋒両刃平造直刀（八世紀）、鋒両刃切羽
造直刀（八世紀後半）と鑄造様直刀（八世紀後半）。
②弯刀系…蔵手刀から古大刀への年代…
蔵手刀（七世紀後期）を始発として、毛抜形刀（八世紀後期）、
毛抜形太刀（十一世紀初頭）、古太刀（十一世紀）への系統。

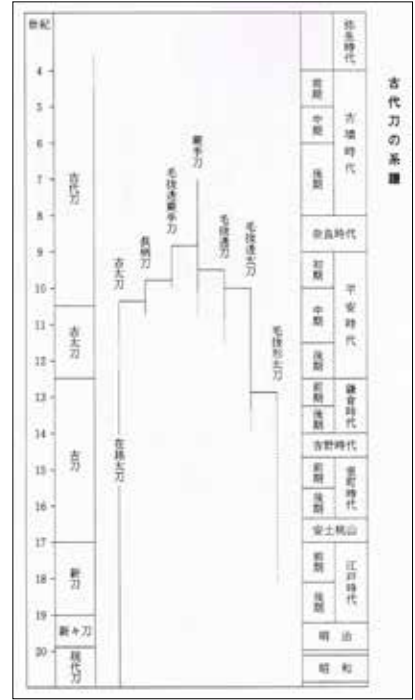


図 81. 「古代刀と鉄の科学」 P.12 より抜粋

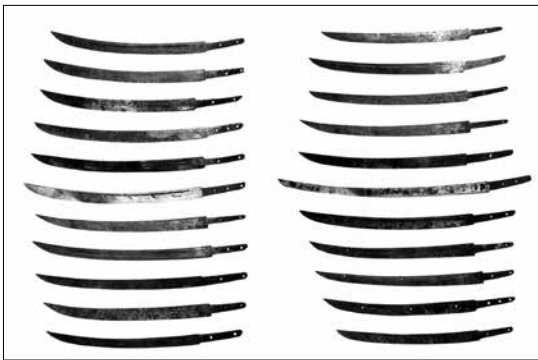


図 83. 塩竈神社に奉納されたアイヌ刀（鹽竈神社博物館『日本の美と世界の刀』p.17）。

一般的に目にするこ
ができる北海道のアイヌ
刀や東北宮城県鹽竈神社
所蔵のアイヌ刀(図83)は、
祭祀用のものと観てよい
だろう。しかし、アイヌ

十一、アイヌ刀（蝦
夷刀）

出土の上古刀はアキナケ
スの影響を受けているも
のが殆どと言って過言で
ない。

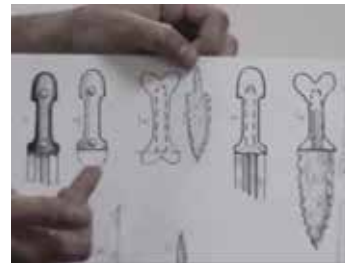


図 82. 骨刀のを説明する Nakov Felix(ナルチック国立博物館研究員)

骨刀



手刀を例にとると、蔵手刀は大陸から日本列島に持ちこ
れた羊角状様式の一つと考えられるからだ(図83)。ルーツ
はシベリヤ方面(後述)と見られる。

が羊角状(或いは蔵手状)の
柄頭の原型となり、それが銅剣
へと受け継がれ、更に銅剣から
鉄剣へと受け継がれ日本に入っ
てきたと考えられるが、同様に毛
抜形の透かし構造の柄もアキナ
ケスに類似している。立鼓柄や
方頭大刀の柄様式は羊角とは異
なっている様にみえるが、実
は骨刀の影響を受けている(図
83)。したがって、日本



図 86. 平取町カンカン遺跡出土刀

はアイヌ民族の直刀にのみ作られている。サルク（沙

- ① 剣形
- ② 卒都婆形
- ③ 片山形
- ④ 平山形
- ⑤ 一文字（切り）
- ⑥ 刃上がり栗

十二、直刀と彎刀の特長を結合させたアイヌアイヌ刀を考察する上で非常に重要な点は、アイヌ民族



図 84. アイヌ刀の茎じり

刀には奉納した部族の印が茎尻に刻まれている。

現代の刀剣鍛冶諸流派に通ずる茎尻と推定されるが、このグループ数はスキタイの刀剣グループの数と同じ6系統である。

日本刀の茎尻



図 85. 茎尻のいろいろ (佐藤貴一『刀剣鑑定手帳』刀剣保存協会昭和30年)

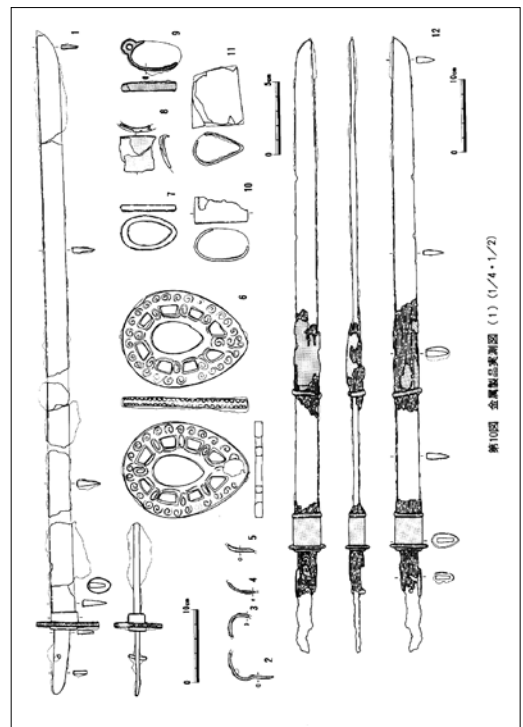


図 87. 久野 2 号墳出土刀

流川流域のアイヌ)の平取の二風谷のカンカン 2 遺跡から出土した直刀(図 86)と勝坂式縄文土器が出土する神奈川県相模原市に近接する神奈川県高座郡寒川町の寒川神社所蔵久野 2 号墳から出土した直刀(図 87)は非常に酷似している。はたして偶然だろうか。どちらもアイヌ刀と言っても過言ではないが、しかし一般的には、アイヌ刀は室町以降の作とされ、論ずることはタブーとなっているようだ。

十三、アイヌの墓標 (把頭、柄、鐔)

アイヌの墓標には 6 つの系統があるが、それはスキタイのアキナケスの 6 グループに合致し、男女ふたつの墓標は、スキタイのアキナケス剣の把頭と劍格(鐔)の形を表し、更に日本刀の茎尻の形になって表れる。実に興味深い事実だ。

図 84 は筆者が北海道ウタリ協会(現北海道アイヌ協会)

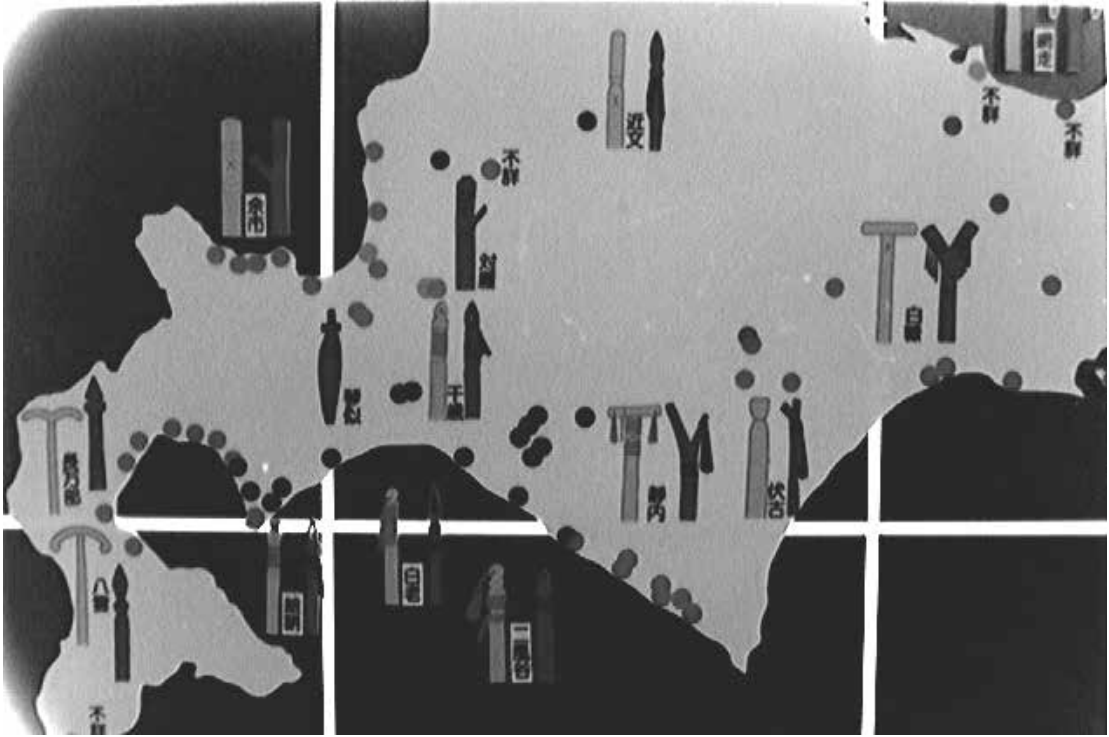


図 88. アイヌの墓標 (北海道ウタリ協会で筆者撮影)

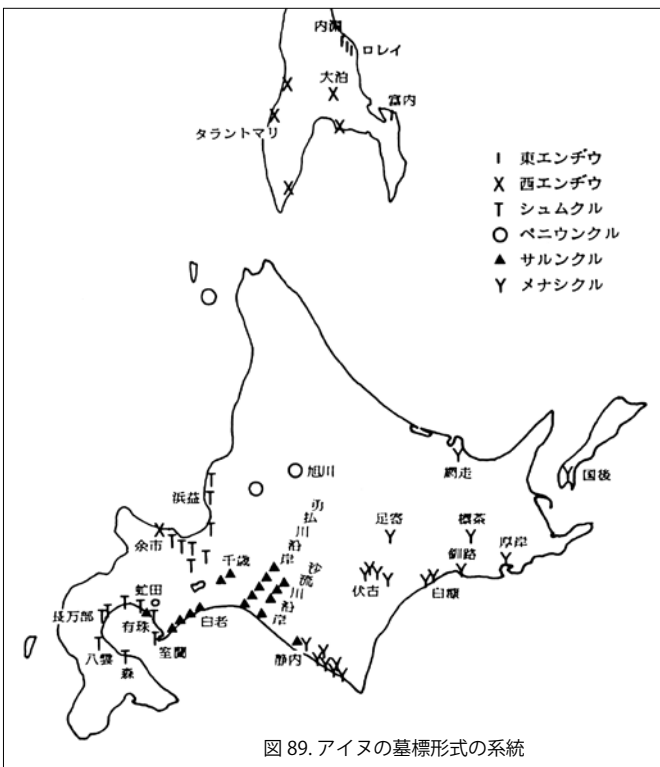


図 89. アイヌの墓標形式の系統

で展示していた墓標をビデオ撮影した写真だが、全ての墓標ではなく、代表的な形が表示されている。
 したがって、本稿では墓標形式の六系統の一つだけを選択し、比較検討してゆくことにした。その他の墓標については、系統に準じて推定していただきたい。

北海道のアイヌの墓標形式の系統は次のとおり(図89)。
 「I」東エンヂウ、「X」西エンヂウ、「T」シュムクル、「O」ペニウクル、「▲」サルンクル、「Y」メナシクルである。

アイヌの墓標：サルンクル

- ① 二風谷アイヌの墓標（アキナケス羊角環頭、剣形）



図 90

- ② 千歳アイヌの墓標（羊角環頭、剣形）

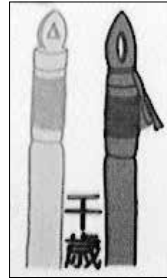


図 91

- ③ 白老アイヌの墓標（アキナケス羊角環頭、剣形）



図 92

メナシクル..

- ④ 白糠アイヌの墓標（アキナケスT形、剣形）

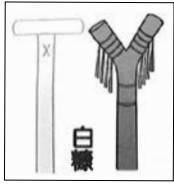


図 93

- ⑤ 静内アイヌの墓標（アキナケスT形、剣形）



図 94

- ⑥ 伏古アイヌの墓標（アキナケス卵形、剣形）



図 95

- ⑪ 網走アイヌの墓標（アキナケスT形、剣形）



図 96

シムムクル..

- ③ 長万部アイヌ（アキナケス羊角、剣形）



図 97

④ 八雲アイヌの墓標 (アキナケス羊角環頭、剣形)

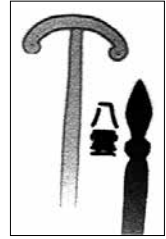


図 98

(不明)

⑤ 琴似アイヌの墓標 (アキナケス茎大刀)

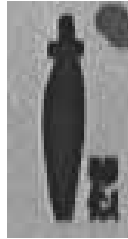


図 99

西エンヂウ:

⑨ 余市アイヌの墓標 (アキナケス楕円形、卵形)



図 100

ペニウシクル:

(10) 近文アイヌの墓標 (アキナケス楕円形、卵形)

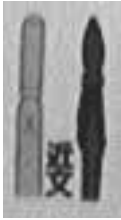


図 101

東エンヂウ

(11) 樺太内淵アイヌの墓標 (I形、剣形、X)



図 102

十三、スキタイグループとアイヌの墓標との比較

筆者が比較検討したグループは次頁以降のとおり。

比較手順は、まずアキナケスの特徴によって分類されたスキタイグループを選び、比較する剣を一つ選択。次いでアキナケスの特徴である(1)把頭(柄頭)、(2)柄の特徴、(3)剣格(鐔)を観察し関連性が見られる墓標を選ぶ。(4)墓標とアキナケスを観察し、それぞれのシンボルに共通性がないか観察。

(5)墓標がきまつたらその形から茎尻を推定し既存の流派に当てはまるか検討し、(2)の柄の特徴から(6)上古刀の柄を推定した。

墓標は男性と女性に別れているので、アキナケスの把頭は男性、剣格は女性になっている可能性がある。剣格(鐔)が円くなったりハート型になっているのは、女性らしさを強調しているように見える。

網走アイヌの墓標を観察した結果では、Y形墓標に松垣が描かれていることが認められた。これをヤスリ目として考察すると、網走アイヌと美濃伝刀祖長光や浪ノ平との関係が伺われることが分かった。それは佐藤寒山先生の「刀剣鑑定手帖」にヤスリ目について記載されている御意見を参考にした(注8。p.107)。

(5) 茎尻：一文字（切り）、卒塔婆形

(1) 把頭（男）

(2) 柄の特徴

(3) 剣格（女）
 剣形=Y
 またはV

(2) 柄の特徴：毛抜形
 鑢目：桧垣：美濃（波平）
 鎌倉鍛冶刀祖。

(6) 上古刀：毛抜形

網走アイヌ（メナシクル…Y）

(4) シンボル X（神=熊）

図 103

Gudermes type
 by Topal
 "Orbeasca" by Vulpe

アキナケス(1)ケレルメス(Kelermes)タイプグループ
 考察方法：(1)把頭、(2)柄の特徴、(3)剣格（鑢）の特徴。
 つぎに把頭に似た墓標を選ぶ。墓標からアイヌを特定する。
 墓標に描かれている(4)シンボルを確認し、(5)茎を推定する。
 (6)上古刀の柄を特定する。(7)アイヌ刀を調査する。

(5) 茎尻：一文字（切り）、片山形

(1) 把頭（男）

(2) 柄の特徴

(3) 剣格（女）
 剣形=ハート

アキナケス
 (2) 柄の特徴：樋入り
 （毛抜きの一種）

静内アイヌ（メナシクル…Y）

(4) シンボル X（神=熊）（注）スキタイの神々はギリシャ神話に基づいている。つまり大熊座、小熊座

図 104

Shumeyko type

① "Shumeyko" type by Topak
 (2) ヴェッテルフェルド (Vetersfelde) タイプグループ
 T形把頭：太樋柄、ハート型剣形鑢、長剣（樋かき通し）

(5)船形茎：栗尻、剣形

① "Griffin type"

(3)ソロカ (Soloka) タイプグループ (羊角環頭グループ)

羊角環頭形把頭、樋入柄、Y形又は剣形鐔、長剣 (樋無し)

(1)把頭 (男)

(2)柄の特徴

(3)剣格 (女)
剣形

アキナケス
(2)柄の特徴：樋入り
(毛抜きの一種)

"Griffin type"

二風谷アイヌ (サルンクル…▲)

二風谷アイヌ (サルンクル…▲)

二風谷

←(7)環頭形小刀
イリマキリ (注7)

図 105

(5)栗尻：卒塔婆形、剣形

① Chertomyk type.

(4)チェルトムリク (Chertomyk) タイプグループ

楕円形把頭：紋様入柄、紋様入剣格、長剣 (樋無し)

(3)剣格 (女)
剣形

(2)柄の特徴

(1)把頭 (男)

アキナケス
(2)柄の特徴：動物紋
日本刀の柄巻 XXXX

Chertomyk type

内淵アイヌ (東エンヂウ…I)

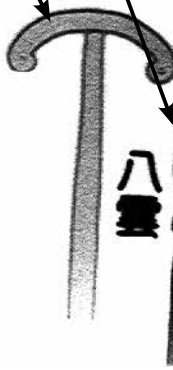
図 106

(5) 茎尻：栗尻、剣形



(1) 把頭 (男)

八雲アイヌ (シユムクル:T)

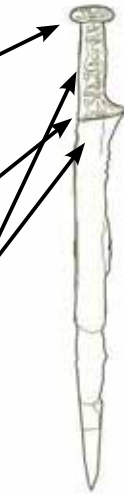


(3) 劍格 (女)
剣形



刀身：踏ん張り
のある舞草刀

図 107

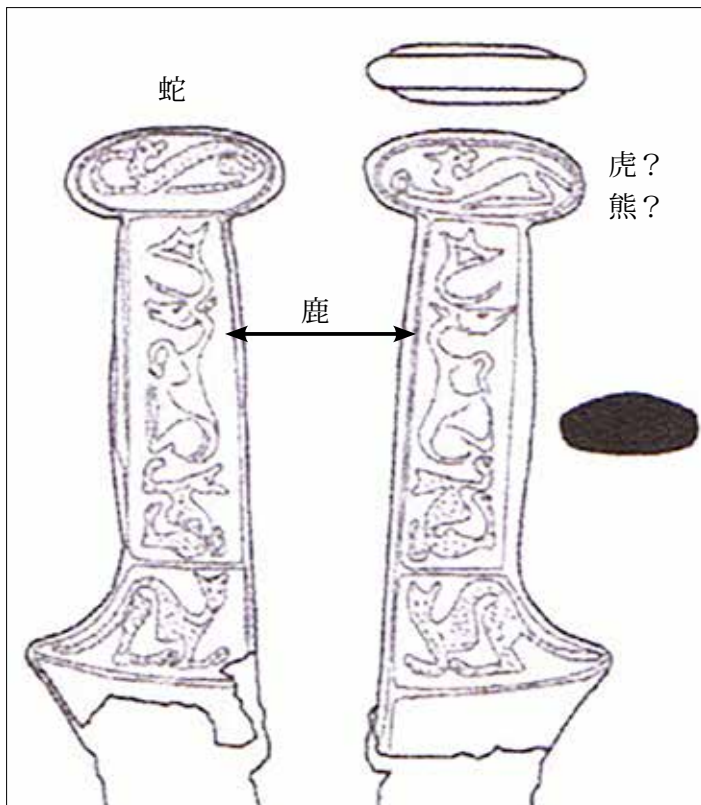


Shulgovka type

アキナケス
(2) 柄の特徴：
柄頭：蛇
柄：鹿と動物
劍格：動物

② "Shulgovka" type by Topal.
橢円形把頭：文様入柄、山形 (片山形) 鍔、長剣

(4) チェルトムリク (Chertomlyk) タイプグループ ①
Chertomlyk type.



スキタイの神：ギリシャ
神話 (星座) に由来



Tabiti : 鹿

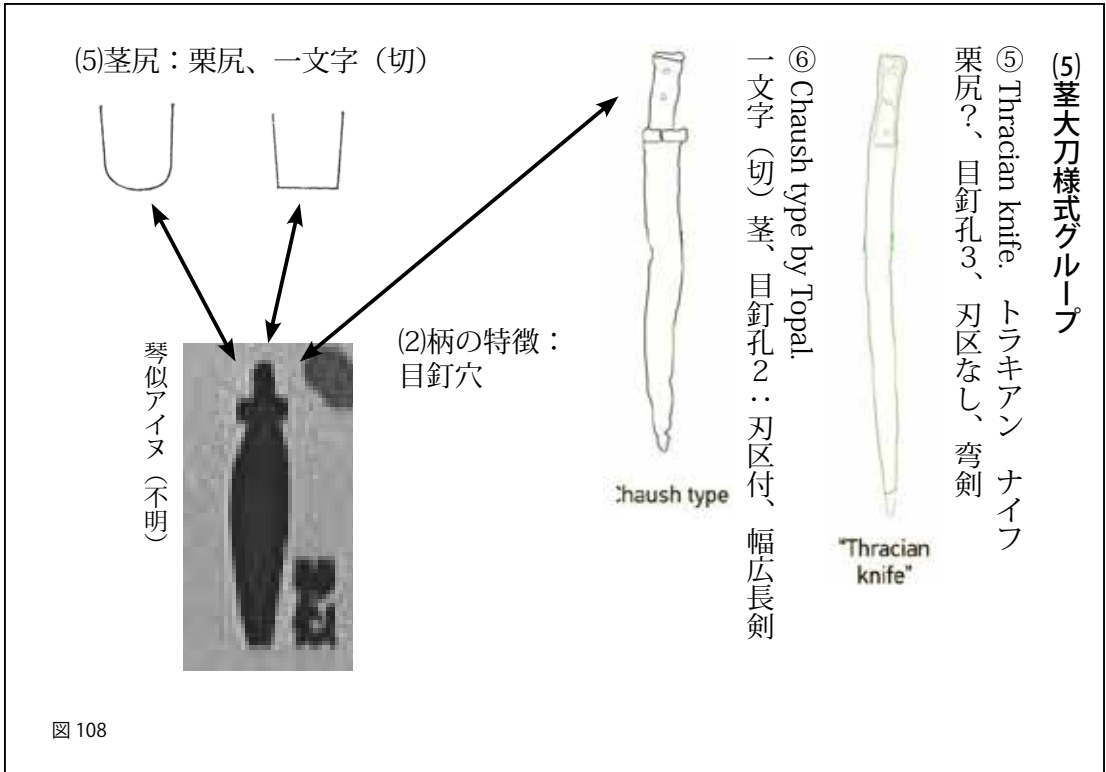


Api : ?

Thagimasidas : Poseidon,
ポセイドン



ギリシャ神話には神剣
を鍛造する時に相槌を打
つ1つ目の巨人の神がい
る。これが日本の鍛冶神
「天眼一箇神」のルーツ。



結論（仮説）

アイヌの墓標とアキナケスを比較した結果、予想以上の関連性が発見された。一つは縄文土器との関係（シヤマニズム紋）、二つは刀剣の流派に關係すると思われる茎尻の形式（エムシと流派の関連性）などである。それらに關連してアイヌの製鉄方法（坩堝法）も推定され、今後關連する多くの人達によって裏づけされることを期待する。

年代の關連性では、アキナケスのグループの年代と縄文土器の年代比較、アキナケスグループの年代と日本の上古刀の年代比較、茎グループと古大刀の年代比較、などが今後の課題である。このためには、アイヌの墓標を詳細に实地調査しなければならぬ。次に本稿で強調した仮説などをまとめて結論としたい。

仮説(1) オホーツク式土器と黒窯は共通している

韓国濟州島の黒窯と呼ばれる窯で焼いた土器はオホーツク式土器に形が似ている。

北海道大学天野哲也教授の御研究によると、オホーツク式土器は多層式土器であるという。黒窯の造り方も同様なので双方に共通性があることが判明した。

黒窯と言う名称は、釉薬を使わずに焼いて自然に陶器を黒くする窯の意味である。数年前に濟州島で黒窯の陶器製作者に直接会い、作り方をビデオに収めることができた。

最初に彼は「日本刀と同じ制作方法です」と言う。

まず粘土を採取して充分にこねる。（彼は採集地から二振りの刀剣を見つけた）。それからしばらく寝かせて以後、陶

器を製作する時は水は一切使わない。鉄を赤めて叩く素延べの如く半円球の板で叩いて横に長く伸ばし、一度折り返す。この時に粘土の間に空気が入らないように細心の注意を払う。もし空気が入ると「フクレ」が生じ窯で焼いたときに割れてしまう。折り返して延ばした粘土を①底の部分、②上の部分、③胴体部分に切断した。

底部分を両手で丸く成形すると、次は胴体部分の下部を丸め、底に合わせるように接続した。この時だけ少し水を使う。胴体部の内部に丸い当て物を当て、外側から紋様の付いた板で叩き、土器全体に丸みを持たせるように成形した。最後に口の部分を付けて、全体を纏めた。(窯のメーカー株式会社シンリユー小沢忠社長によると、この方法は古唐津焼と同様であると言う。)

なぜ水を使わずに叩くだけの素延べなのか、なぜ折り返すのだろうか。彼の師は人間国宝だったので、遠慮して私はそれ以上質問しなかった。多分、耐火性を高めるのが目的だろうと推測した。縄文土器の耐火温度は約八〇〇度である。しかし、黒窯はどうであろうか。

仮説(2) オホーツク式土器、擦文土器は耐火度が高い

黒窯に水を使わない理由は①土器の耐火性を高める為で、②折返して焼く理由は、一二〇〇度の高温で使用しても耐えられるか、実際に窯で焼いて試すのが目的と推定される。窯の内部温度は一二〇〇度である。

以上の観点から、オホーツク式や擦文式土器の製作も、①耐火性を高めるためにできるだけ水を使わず、②折返して窯で焼き、土器が一二〇〇度の火にかけても割れないか試

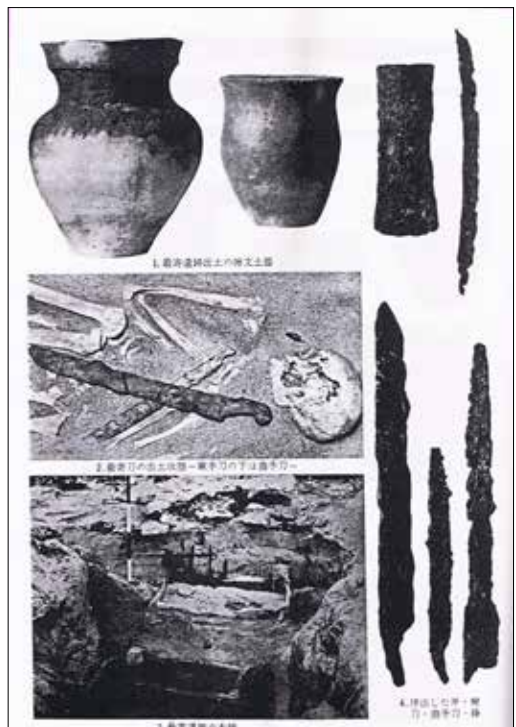


図 109. モヨ口遺跡 (擦文土器と伴出した遺物) (注 8)

して製作されている可能性が高い。しかし、全ての土器に当てはまるわけではない。この一二〇〇度の耐火土器の使用目的はなにか。

仮説(3) 坩堝と擦文土器でウーツを作ることができる

坩堝法は一個の土器を使う方法ではない。土器の中に小さい土器(坩堝)を密封して加熱する製錬方法である。

かカオリン(インドのウーツ。多分、塩)と一緒に入れて密封する。この坩堝を擦文土器の内部に重ねる



図 110. 熱処理されたパルカリアン刀 (300 年前に製作)



図 112. アイヌ刀 (毛利コレクション展図録より抜粋)

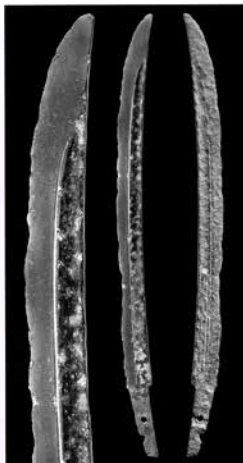


図 111. 清平棺上刀
この刀の容姿はアイヌ刀
そのものだ。アイヌの作
か

仮説(4) アイヌは弯刀と直刀の特長を融合させた

ように数個設置して自然の強風を利用してできるだけ高温(二二〇〇度以上)で坩堝を加熱する。擦文土器も坩堝も後には破損してしまっただろう。しかし、焼け跡から鉄を拾い出すことができる。坩堝で製鉄した刀剣は九十度に曲げても折れないと言う(図二〇。注五)。この点が非常に重要だが、日本で行われていた可能性はどうだろうか。

刀剣上でアイヌとエムシの関係がうかがえる物として筆者が注目しているのは、岩

手県の中尊寺の清衡棺上刀である。形はアイヌ刀で地鉄はまったく異っている。もう一点、アイヌ刀にも折返し鍛練されて所謂日本刀の地金と評されるものがある(図二二)。

この強靱性のテストをする手立てはないものだろうか。つぎに清衡棺上刀と毛利美術館のアイヌ刀を墓標と比較検討して見ることを提案したい。

清衡棺上刀は、アイヌ文化(海の神シャケの形)とエムシの作刀技術が融合していると思われるので、墓標との比較研究すると、なにかが発見される可能性がある。

現存するアイヌ刀は室町期以降とされるものが多いが、その理由は三点考えられる。

第一点は、アイヌにはイワクテと言う習慣があるので、古いものを土中に埋めて天国に返すので、アイヌの古刀はなかなかみつけれないこと。

第二点。アイヌ刀の地金は日本刀と較べて劣るとみられるのは、儀礼刀を観察した結果であろう。

第三点は、製作方法が異っている。アイヌ刀はウーツで製作した可能性がある。図107はバルカリアン刀で強靱だが、地金は日本刀のように美しくはない。強靱性を高める熱処理技術があった筈だ。

仮説(5) アイヌは熱処理技術を行っていた

嘗てバルカリアンは、作刀してから動物の角に入れて八〇〇度から七〇〇度で焼き入れを行ったと言う(タマスカス刀鍛治ハムザット・バチエフ)。これは錆止めと表面を美しく見せる効果がある。鉄質が硬化するので重ねを薄くし、強靱な刃にする事ができる(図二〇)。しかし、詳細方法は現在失伝し

ていると言う。これは低炭素鋼の熱処理方法である。

もう一つ失伝しているのは、三種の鉄（白山神社伝承）で鍛えるというダマスカス刀の作り方である。現在のバルカリアンは高炭素鋼（炭素一・三％）と低炭素鋼（炭素〇・三％）にクロム、モリブデン、ニッケル（各一％）の合金を合わせた十一枚の鉄片を一気に鍛着してダマスカス刀をつくる。この技術は古代の日本ではニッケル、クロム、モリブデンの入手が難しかったので、自然消滅したのではないだろうか。

仮説(6) 移配されたエミシは流派の元祖である

東北部、関東及び北海道で出土する蔵手刀、毛抜形蔵手刀、立鼓柄刀、蝦夷刀は全てエミシ（アイヌ）刀であると筆者は推定した。今後さらに墓標の観察を進めることにより、アイヌ鍛冶（スキタイ鍛冶）と関連性がある全国各地に点在する流派との関係を調査検証する事が望まれる。

仮説(7) 日本に渡来したアーリアンの後裔たち

日本の上古刀はスキタイのアキナケスと同一形ではない。しかし、異なる年代の六グループの特徴が余すところなく伝承されていることを、どの様に見るべきか。

（問答形式）

① 日本の彎刀の始まりは？

答…5世紀ころタールが渡来し彎刀を持ち込んだ筈だ。

② アキナケス直剣の特徴が彎刀に伝承された時期は？

答…紀元前3世紀のアキナケス時代に渡来したのではなく、スキタイがタウリス／スキタイとなり古代ギリシャと共同体となつてから渡来した。つまりは紀元前2～1世紀以

後5世紀頃と推定される。

③ シベリヤでは環頭が羊角に変様しているが、九州には素環頭直刀が到来している理由？

答…素環頭大刀はシルククロードを経て到来したが、蔵手刀はシベリヤ方面から到来した文化である。シベリヤ方面の羊角小刀（両刃）を持ち込んだのはスキタイ／チュルキー（劍の語源）であろう。

素環頭大刀は古代ギリシャ人が使った。古代ギリシャ人の背丈は約九尺以上あったそうなので、藤原清衡はギリシャ人もしれぬ。日本の神話はギリシャ神話に基づいているので、指導者的立場の人になつたと考えられる。

ギリシャ神話は紀元前一世紀にギリシャのヘロドトスが北方民族の神話を編さんして作り上げたので、古代ギリシャ人が紀元前1世紀頃に素環頭大刀と神話を日本に持ちこんだであろう。

④ 関西や関東に直刀が出土するのは何故か。

答…ギリシャ系アイヌ（環頭形、トラキヤン系莖形）は九州に上陸し、関西を経て北上しながら直刀を製作した。

⑤ 上古刀は、なぜ莖造りが主流になつたのか。

答…アキナケスの莖形グループはトラキヤンの莖形で、タールも作っていただろう。アキナケスの最終的変様形である。莖造り刀は古墳出土の小刀や大刀に表れるはず。つくりが簡単で柄を付けるのに便利だから。

⑥ 透かし柄の毛抜形蔵手刀が毛抜形太刀までつづく理由？

答…エミシが日本に定住した事を示している。

⑦ 北海道アイヌは現在作刀していないのは何故？

答：東北で優秀な刀鍛冶エミシは、北海道に北上できず東北藤原家の鍛冶集団として仕えた。彼らは時の権力者によつて各地に移配され、刀作りに従事させられた。北海道八雲アイヌグループは北海道に移住してから東北エミシの真似をして作刀し、祭祀に使用しただろう。古い時代に北上した樺太の内淵アイヌは、実戦刀を作刀できるかもしれない。

(以上)

御礼：・

末筆ながら、本稿を書き上げるために、北海道大学天野哲也教授とトルコ国イスタンブールのアシム・エルトゥルク氏の多大なる御協力を得た。

天野先生からは礼文島の元地遺蹟の写真提供など多くの御教示をいただいた。

アシム氏は、スキタイに関する二冊の書を筆者に郵送してくれ、インターネットからスキタイ画像をダウンロードする手順を整えてくれた。画像は本書に掲載させていただいた。紙面をお借りして両氏に厚くお礼を申し上げる。

【参考文献並びに注記】

- 1、小学館『宇宙』
- 2、講談社『縄文土器大成』第2巻中期
- 3、ウノ・ハルヴァ(著)・田中克彦(翻訳)『シャマニズム』アルタイ系諸民族の世界像(東洋文庫)(日本語)

4 Emiene Somnur Ozcan, "The Identity of Scythian and Turk" 2020. p.54

5、アテネ考古学博物館ホームページ

6、Ivan Marazov 『Thracian Warrior』

7、ユリー・ピーツ著『古代への研究1-2-1鉄の力』(菅原鉄孝訳)、『舞草刀研究紀要第13号』p.38。

8、Oleksandr Shekhan "Swords and Daggers of the Scythian Forest-Steppe", (BAR Publishing 2020)

9、From "Akinakai: Scythian swords and daggers" (Communication for Eurasian Department of German Archaeological Institute, May 25, 2016

10、『秘伝』2008年8月号p.55。、ルツボ、製鋼は、5世紀にトルコ領だったウズベキスタンのファルゴナ (Fargona City) とトルクメニスタンのメルブ (マーブ、マルグ) (Merv City) という街で使われた、という調査研究が人類学者 Anna Feuerbach によつて発表されてる (Feuerbach, A. Griffiths, D.R., and Merkel, J.F. 2003. Crucible Steel Manufacturing at Merv. Mining and Metal Production Through the Ages. P. Craddock and J. Lang (eds.) London: British Museum. 258-266.)。

11、毛利総七郎の世界ー毛利コレクション展ー(平成8年)石巻文化センター

12、菅野茂『アイヌの民具』(すずさわ書店1978)

13、佐藤貫一著『刀剣鑑定手帳』(日本美術刀剣保存協会刊、昭和30年)。

14、石井昌国著『蔵手刀ー日本刀の始原に関する一考察』p.134. 雄山閣出版(昭和41)

15、ドイツ考古学研究所によるスキタイの研究書電子版

16、石井昌国、佐々木実『古代刀と鉄の科学』雄山閣出版、考古学選書39.